

門へ13
3397
1

為藥亭主人著
葛飾北齋画

くわんかしのり
國字鶴物語 くわんかしのり
全五冊

文化戊辰春發行 柏悦堂梓

昭和九年
二月二十日
本屋及
氏字

又本新

嘉祥
中

い書堀河帝承徳二年。初言匡房卿太宰府子
たの頃より。高倉帝治承二年。三島頼政卿
平家院より。明年より。八十余年の記。
特々美福院三女と隨其美鶴と化て出家。際
余歿頼政卿の家より。たのと詳載の蹟。續
出子頼て。同黒屋子。たの。處より。上皇の道。
の貴と。い。い。不吉事と殺て。報て受。て。裁の。其。後。

の雄といひては愛鬼子纏めて福子羅威權を
不可満る勇武といひ不可矯と怒りて其を困
為す。東家の国秀が下ま在ては上皇、寛徳の
あふ、院の惨酷あり、論ふ頼政卿勅を奉り
是を射、廣直主に従て是を刺し、竹の衆あり。
長根は衆無して福子逃る、三女子異はして不
祥、三女子同、九善惡の報、延連ありてこそ

疑と發者多、其延連ある故、不可知といひ善を
為て福無と疑ひ、惡を為て福無と憑者、原要人
こ、惡を為て災無と不羨、善を為て祥無と不憾
者、原善人こ、上智と下愚と不後、舎て不論。
中人報の延連と疑ひ心と動る、ふえ、国秀乃て其
善字橋兒と南海大寺に祈り、大士三兒を護り
ふく、小蛇川を涉り、忠綱と統、菅大蛇を照り

徳雅と道不終より生島の神石守寺の佛の不
 と教。勸懲の心解と云ふ。長根の善と勸懲
 と解より宜ふし。感を解譬を殺より宜ふし。
 譬を殺して感を解也。教の微意を云ふ。勸懲の
 心不しといふ。婦人好と違ふ。男兒を云ふ。荒者いふ。等
 又て心実。贖償と云ふ也。

文化イ卯秋 与藤亭主人題

といふかぬえりのがら
 国字鶴物語

一の巻

玉貫柳
とらぬく
やまがき

うしろふかぬまびと
ふせき
うらのみ
うらふて
 義俊海寇を防く二指と失詰
うしろしちわとけ
うら
うらうら
うらふて
 浮橋観音板析く三兒産産詰

兒子指
このて
がし

とむのうらうら
ま
ま
ま
 鳥羽上皇色は荒く禍成醸詰
びふくらんわんりつと
わ
わ
わ
 美福門院籠を競く妬と逞詰

二の巻

馬鬣松
うまの
まつ

うしろま
うしろま
うしろま
 妊婦韓衣良叙と懐く溢ら詰
うしろま
うしろま
うしろま
 玉環は君濡衣を被く害ら詰

早黄葉 あきば

三女の靈鶴と化く近衛帝を搦詰
一箭の答言妖を陰く獅子王を賜詰

百日紅 あかひ

玉環老猿と愛く頼政を陥詰
韓衣菅蒲不憑く来道を魅詰

長節竹 たけ

蓄生塚の鬼仲綱を崇詰
獅子王の劔虎妖を斬詰

三の巻

四の巻

良木立 たけ

妖女菅蒲頼政を激く謀叛を勧詰
良馬木下宗盛を走く于戈を興詰

無花果 なし

高倉宮相士の言致信しく光明山を亡詰
源三位埋木の歌を誦く平等院を死詰

霜置箱 あき

廣直礼を避く播州を隠詰
鶴太獵小従く蛇妖を殺詰

風待花 かぜ

艾虎怪を為く早太愛子と射詰
妖猿子妖息く義廉旧識を逢詰

五の巻

寄生木

白玉椿

旧怨新新く昔補白又小伏詰
 因縁を感く笛竹金仙よ帰詰
 典侍鶴を若狭小祭く妖と接詰
 頼兼綱若狭伊豆よ迎く家以真詰

通討五卷十二章標目



智力不可測
 白露變朱唇
 遠贈人間界楊柳一枝春

菅原長
 勝六郎書

武庫令
頼政

三十一

言
如

詭
推託

娥
眉七

十五

夢
獲鶴

孫
姫

菅原長根賛
恭亭主人書



位
白ひし

夕
あハ

夕
うやの
んハ

夕
の

夕
ハ

夕
乃

夕
ハ

夕
ハ

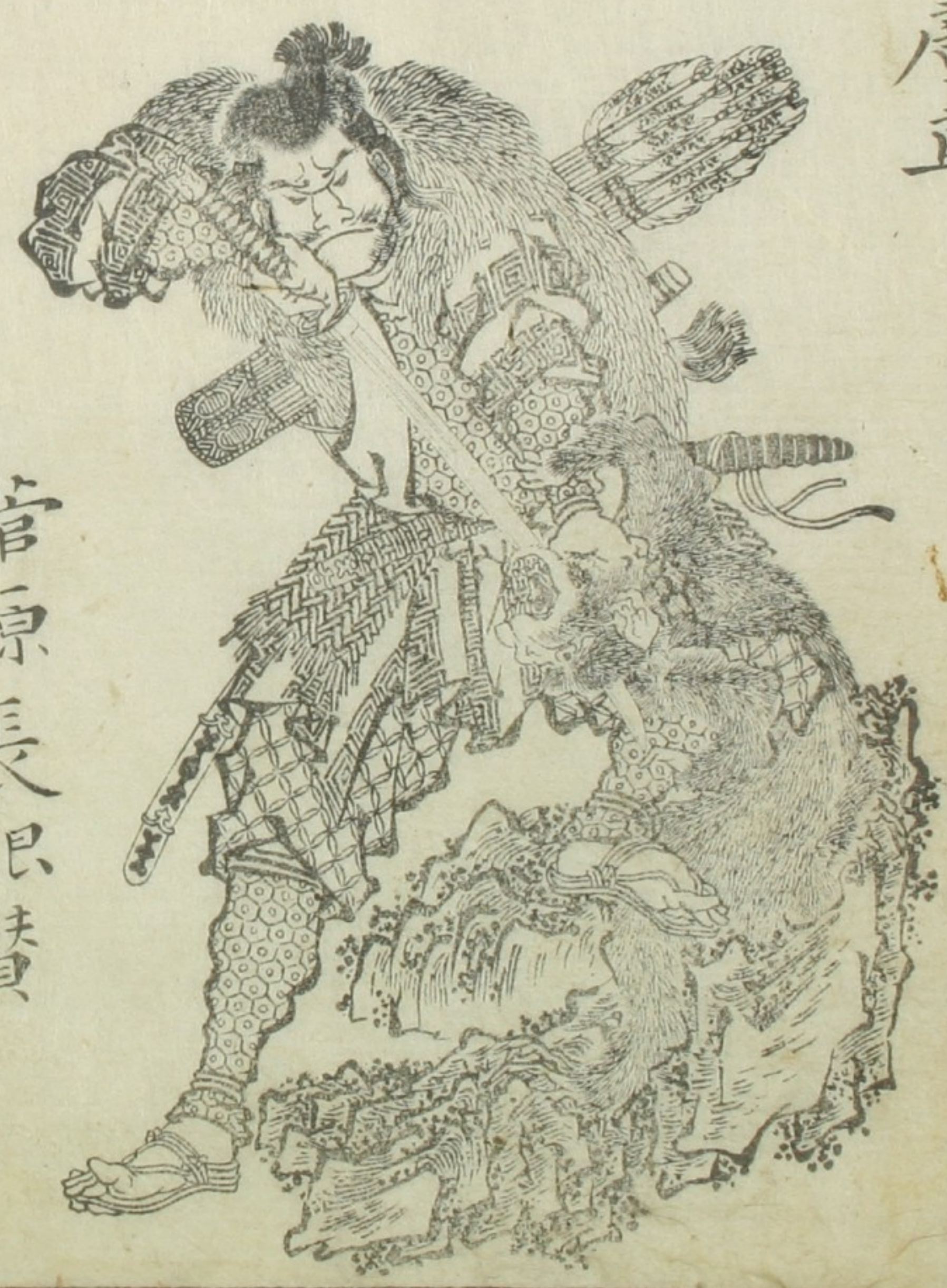
妖
女
爲
蒲

長
根



猪俣太廣直

九刺怨己
深三害穰
不退息兒
鐵心糜射
乘石腸碎



菅原長根贊
可庵主人書

しと
つら
ふれや
か
玉のを

長根



韓衣

あつちの
雪のふり
さとして
川
うる

玉環破昭王
此君朽子獻啼

人子
又
長根



石川義廉

懸冠韜
光假發
狂
傳檄説
士真勤
王

菅原長根賢
勝子昌書

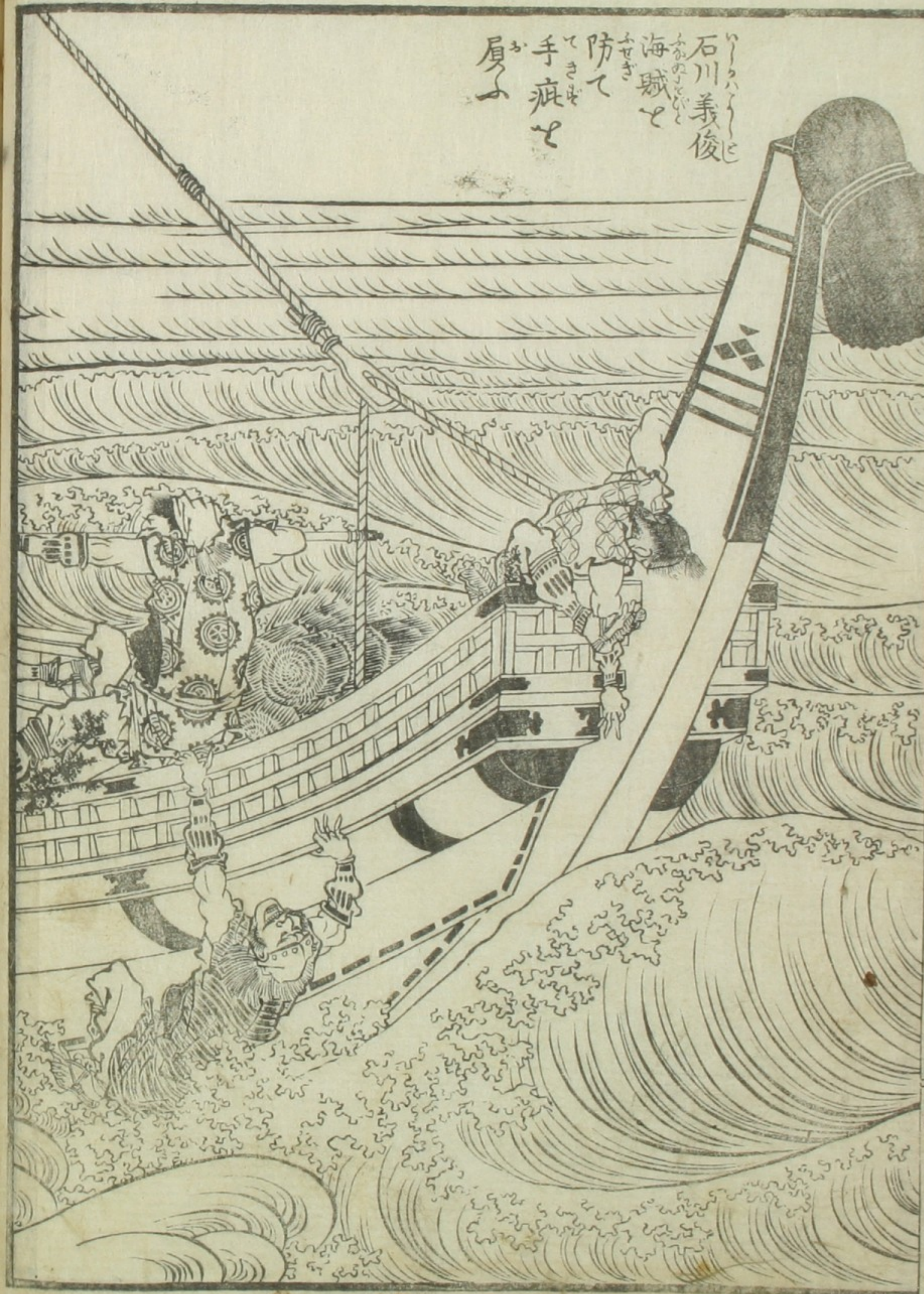


りのハ吾子之唐朝の六郎蓮華あつらんハ吾家の十郎ハ芝
 蘭あつべし。彼色を以身死亡せり。子女を以家と與べしと
 常ハ激されきり。承徳二年匡房卿太宰帥ハ任せらる。不
 就ク衝石不下り。任せらる。帰京の時ハ匡房卿世のあつた
 とらんとしてや。道理あり。收るりの死一艘ハ積道あつて
 受る物と又一艘ハ積く上られきり。道ありぬりの船を
 りる。義俊が乗る。理あり。取る船ハ侮寇ハ奪ねて空
 船あり。のちりきれば。世ハそや。季ふる。ぬ人ハ正直なる
 ぞ。といふれ。きり。と京童の口さかなくて道ありぬりのを大船
 不積ぞ。り。收入る。死議論を悼く。く。いひ。さ。せ。らん。

驚。金破。屍風。あつ。死。精。く。理。あり。の。と。号。侮。寇。ハ。濡。衣。を。せ
 くと人の耳を掩ふ。よ。と。と。る。ど。う。と。ふ。け。の。と。と。匡。房。卿。侮。寇
 の。の。ふ。り。せ。り。世。死。諷。の。あ。つ。の。あ。つ。る。べ。し。全。船。ハ。善。悪
 の。死。ハ。り。と。と。ぞ。れ。ど。原。人。ハ。禍。福。の。命。あり。義。俊。ハ。既。ハ。鯨。夫
 乃。名。不。應。く。與。属。と。あ。つ。づ。り。し。死。武。家。ハ。育。く。刀。汰。と
 長。ド。た。ら。ふ。り。り。辛。く。し。と。命。を。か。と。と。と。い。へ。ど。指。さ。る。と
 つ。か。り。と。射。御。の。術。公。の。あ。つ。あ。つ。と。り。ま。れ。ハ。青。雲。の。志。と
 棄。く。白。雲。の。御。を。慕。ひ。け。日。野。村。ハ。兩。居。の。地。を。ト。と
 授。死。業。と。し。と。十五。六。年。を。か。ら。り。し。が。四。五。年。前。ハ。天。野。の
 の。女。浮。橋。死。娶。く。い。と。ひ。つ。よ。り。し。う。と。義。俊。始。仕。の。年。と



石川義俊



石川義俊
海賊と
防て
手疵と
肩小

石川義俊

ど浮橋うきばしも余あまふちのひこづつひくらうとあつらふ法界寺ほふがいじと
つらへ境内うちまのとひろく本尊ほんぞんへ文六ぶんろくの彌陀佛みだつたふつを居薬師いやくし
堂どうの金銅きんどうの座像ざざう日天にてん月天げつてん十二神じふにしん二王におうのど左ひだり右みぎの列りよく觀くわん
音堂おんどうふの楊柳やうりゆう觀音くわんおんの像ざうあり。五天堂ごてんどう鐘樓しゆろう大門だいもんその
外諸堂ぐわいしよどうを室むろ檀たんを摩まづれも冥驗めいげんありとちうとど
来きる人ひととちうとどし中ちゆうふも觀世音くわんせいおんの乳汁ちゆうじ出でる者もの一夜いちや
終しゆうく祈いのりぬれぬれ冥驗めいげん灼しやく然ぜんとす。夫おつとよりくしくひそふ歩あゆを
ととび兒こららき愁しゆう切せつ切せつといのうきうふ百日ひやくにちふつつの夜よ二東にとう
の鐘かねの響ひびき後のち門かどふ人ひとのおとふけとひあふあふ起おこ出でる門かどの
戸かどもやうふのけ誰たれとと問とへむつふふん忘わすれんんは程ほど百ひやく度どあ

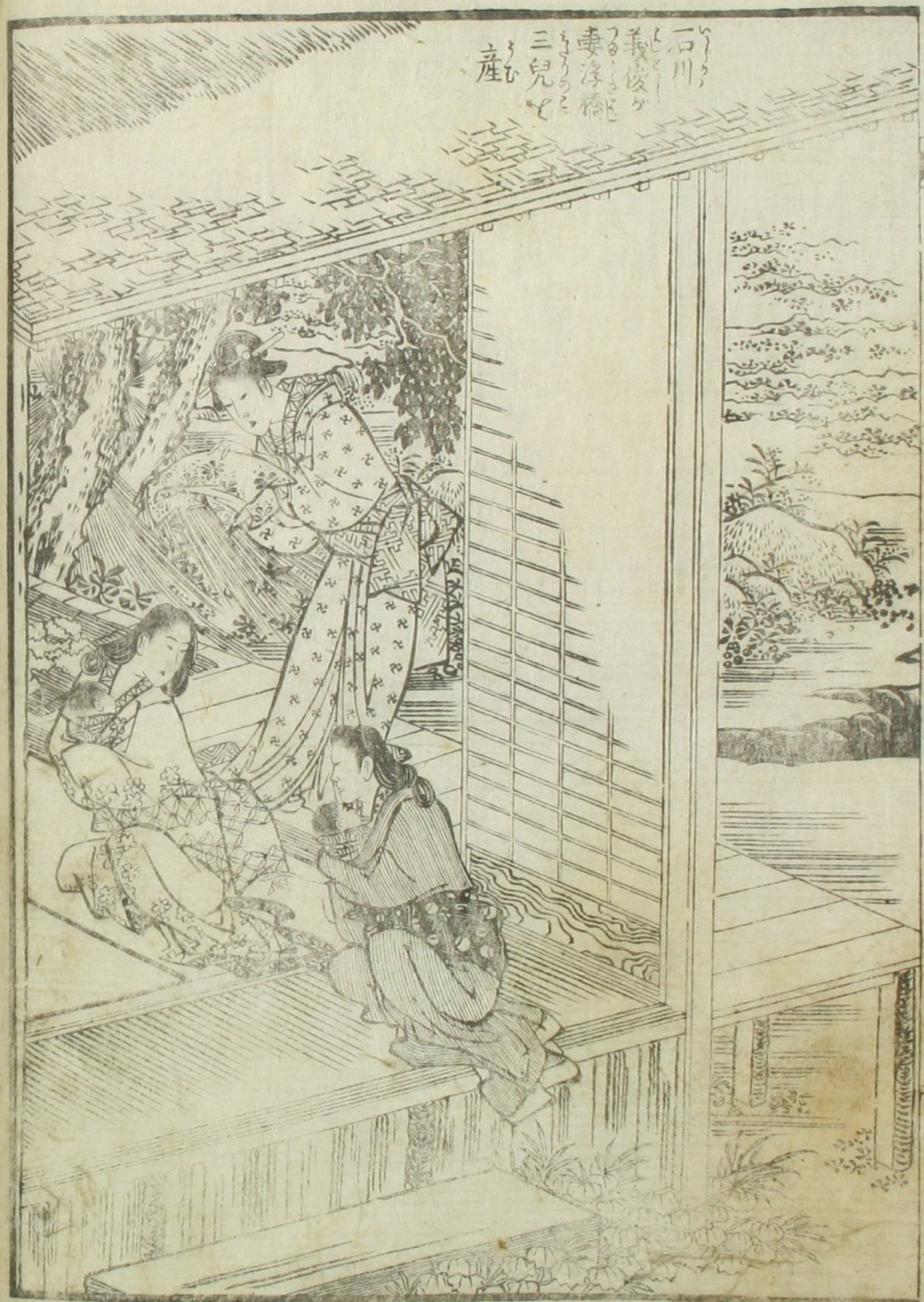
よりも逢あひひの段だんとく入いるるへへままががふふととるるをを法界寺ほふがいじ
の觀世音くわんせいおんふとくましくましくきれきればかりひうけぬるとくらとひ
づとづと願ねがひひもも側わきふ路ぢ居いるる今いま宵よこそそ汝なんぢがが願ねがひひするるへんへんとく
来きるるれれいいととく前まへふ立たちち歩あゆゆふふ行ゆとももるるししままががくく法ほふ
界寺がいじふふつつららききうう日ひ来きるるへへあありりととももああららるる池いけの中なかつ島しまふ
誘いざなひひ左ひだりへへ雌め池いけ右みぎへへ雄お池いけと号なづけけ女に子こややわわししとと男おとこ兒こややわわしし
ささととののささふふ浮橋うきばしああむむしし沈思しんしとと常つねふ夫おつとの義ぎ後ご
人ひとままれれとと婦人ふじんの身みととああららるるううらられれ百ひやく年ねんの苦くるしみ樂たのしみ他人たにん
ららとと人ひとふふ語かたへへ聞きくく男兒おとこへへ戈かああれれどどもも其家そのいへははああららるるががめ
ばば宣のたまふふととくくががしし女子に子この美うつくささめめととべべ雲うのの上うへふふみみややづづらら

大和の縮紙用ハ寧樂の字を祝てゐるべし。勞神大なるらざる
 中ハ曝書の時未ねとて産婦のつゝあつたの公あつたる姫は委
 奴婢ももろく掟く都の方ハ出行もる。これハ匡房御常
 小僕ハ江家の支預とて累代の文書ハ自修補し
 多ハど充棟の書籍行牛の巻軸紙魚ハ風前の落葉拂
 へとも盡るまじく故紙ハ雨相後の芭蕉つゝこれども敵大ゆと
 一塾生ハ多きれど帳中ハ秘めめいつも義俊徴てつゝ
 ろハ匡房御天永二年小卒のひく後ハ曝書の時ハ
 江家ハ参つゝあつた例なればせんさなし頃ハ雷ハ月の季ハ
 ぐ夜ハ更ハ蒸暑うりしうば浮橋ハ蚊蟻の中ハ居ハ在奉家

庭よりとち涼とて夜はく更とてともあつたや
 ありハ寅の刻の半とやとががさハ産の氣あつてくは
 げある声あげてふと喚よ。まはして立ささぐるもかく平
 とや産ハありて声高やうと啼てえれば女兒ハ收生媪息
 もつきのあぐり走りまゐる。産の平ありし歡といひをぐら
 麻手ハハ一眉とめ声とひそめていまど一人おんまへ
 必驚あふなせよハまゝあるさぞといふハ浮橋ハ抱ハ騷ぬ性
 よてさものうばのれ取ハ乱さじと念ど居る主のめくハ告ん
 としよとおもふさうわねハとてさぐめぬ。夜ハ朗と明て辰の刻
 もまぐれど何のけしひもあまよ。人ともあやしことともよん

さこがねて立つ居つまるよ巳の刻のせうりよ又一人の女兒
 と産おとて今はんやまじとありよ腹中よ胎動の
 めと助産よこれいふよと問どいふとさるるめん紫荷
 車も既よ下ぬ學生よよめとさうけがはまるるの日の長も
 周章よ打まぎれて日影や傾き申の刻のさどめよ又
 一人の女兒と産出ぬ穩婆もめまらまどい男兒三人
 産ぐ帝王の御車よもまのりめひて幸あるべきと女兒ハ
 いりやわりのめん姫もこれまでまげむと嘲る顔色も
 とけるつしましねば人よめしめふなとらよ打黙され
 ど取めぐる料ハ三度の殺めとそおのちをさぐべきことば

えてはめりたり。浮橋ハうの知巳の姫を咄びて夫よける
 知せんもとづし一人ハ残る二人のみどり兒ハを
 めこよ任まぬとせん。いふよもして育ぬるべし。よとをば
 くもありなバ夫よも告ん育る料ハ妾時とおくらんと
 志のびやよりらふよ姫が隣よけりて兒去ひたる女
 めれバまよ養せんとして夜よ入りて彼女伴ひまり二人の
 兒ハつれ行ぬ浮橋ハ奴婢ハめとよりける知りしる人
 のりきり咄び居てくくくくひつ夢三兒産するかと夫
 ハ又よ世よも洩しあふな洩なばけ一群の人とて恨ん
 と慈よ教おき酒餅めどはくめさまは皆誓して出行け



石川
義俊
妻
三兒
産

國字夜物語卷一

浮橋をめぐめて狗の車をぶきまうて夫のわらふ人走らざる
 よ翌日再び来り首子をねば下よも並で抱めさきめどし
 つゝ七夜よもあがりねば名ハ何と呼ん男兒あつたそ
 のれ女兒ハその心よまきせよとゆて妾博士ならしむる
 ハ知れぬば兒寅の刻をうりよ生れれば長節竹とや称ま
 してりよよ住名くとその夜ハあつりの人呼集酒盛り
 てけりどの費心忝ふといひてよろこぶるけりうきりかし
 親とりよりのよありてこそとめぐめて親の慈ふりしりるハ
 知れぬば語りつぎ書とめたるゆと聞もえもはたととも
 身よきこしく受ぶらんるハおもひしくうりこがりのぞ

三人産つりとして二人で殺睦奥人の残忍ハあつざるべし
 まして夫義俊ハ文学あり續日本紀文武天皇四年
 十一月壬寅大和國葛上郡鴨君梗賣一産二男一女賜絶
 四足綿四屯布八端稻四百束乳母一人又慶雲四年美
 濃國言村國連等志賣一産三女賜穀四十斛乳母一人
 わど載らるるも見るべし浮橋いりあるんよて二兒とくじ
 くるよやとりよ人もありねどいりするは義俊ハ知れぬ
 せきとるるとめん近世やういりよりくまとも一枚の紙よ
 記て大路でも声のりぎり呼りて鬻めなくとさといふ
 ハ人の質直よていさくと誓ひくするハ洩さざしめるべし



鳥羽上皇



鳥羽上皇
美福院
と愛

鳥羽上皇
美福院
と愛

本院白河崩つらねさせあひて後ハ誰たれもがりのめく前関白忠
 實公女泰子入内いりうちして高陽院かうやういんと称なづ又参議さんぎ藤原長實ふじわらなかつね
 の女得子むすこと徴めして女御にようごとい美福門院みふくもんいんと号なづけ時女院ときによういん
 人のりて美福門院みふくもんいん寵ちゆうと專せんにして上皇政じやうかうせいはおこしりあふ
 今年ことし半百いそぢゆうありあひていめて方こうぼうのるる敷慮しきりょのまま
 ありしりバあくく渴くわくと志しのびて俄ふた水みづで得とるが如ごとく美妍みけん
 ととぎぎ聞きちるのハ新あらたと戴おほく残女あづのめ襖ついでと負おふ販婦ひんぷでも
 又またささてああいいだだ思おもの河かの淵ふち瀬朝せあさくくりりてこ雉鳩こじこの声こゑ絶た
 心の水みづハ仇浪あだなみ暮くここぎぎてふ栲舟くさねふねも空流むかひくわうりゅう中なかも美福
 門院もんいん皇子みこ體仁たいじん帝ていと生うままひひ三さん支しの時とき崇徳たうとく帝ていとおおららし

位ゐハ即すなはちああひていりハ二方ふたうの女院によういん待賢たいけん寵ちゆうとああるるいいああぐぐ
 もああぐぐどどききて待賢門院たいけんもんいんハ年とし齡ねいももるるりりハは園うゑををああぐぐバ
 力ちからああぐぐ上かみハ絶た世よ美人びじんと獻けんて門院もんいん福美ふくみの寵ちゆうと奪うばんとては嬪ひん
 娟いさ處女むすめととりり待賢門院たいけんもんいんよりハ韓衣かんい玉環ぎよくわん高陽院かうやういんより
 小この君きみととりりてまああるるせせああふふ三人さんにんとも青春よせいいいづづハはささぎぎ
 て卧待月ふしまちづきハ足あららどど眉まゆハ遠山とんざんハ霞うすりりるるりり翠みどりよよて
 春情はるのこころううごごりりるるめめののめめくく唇くちびるハ丹楓にづきの雨あめと帯おびととりり紅べによ
 て秋色あきの色よよるるぬぬるる人ひとははじじいいづづれれかかととりりももええええぎぎりりるるハ
 上皇じやうかうふふくく敷慮しきりょよよるるいいつつととああぐぐ門院もんいんのの方かたハはややりりるる
 小このややりりるるせせああふふ二方ふたうの女院によういんハはこれこれととああぐぐててららるるここどど門院もんいん福美ふくみハ

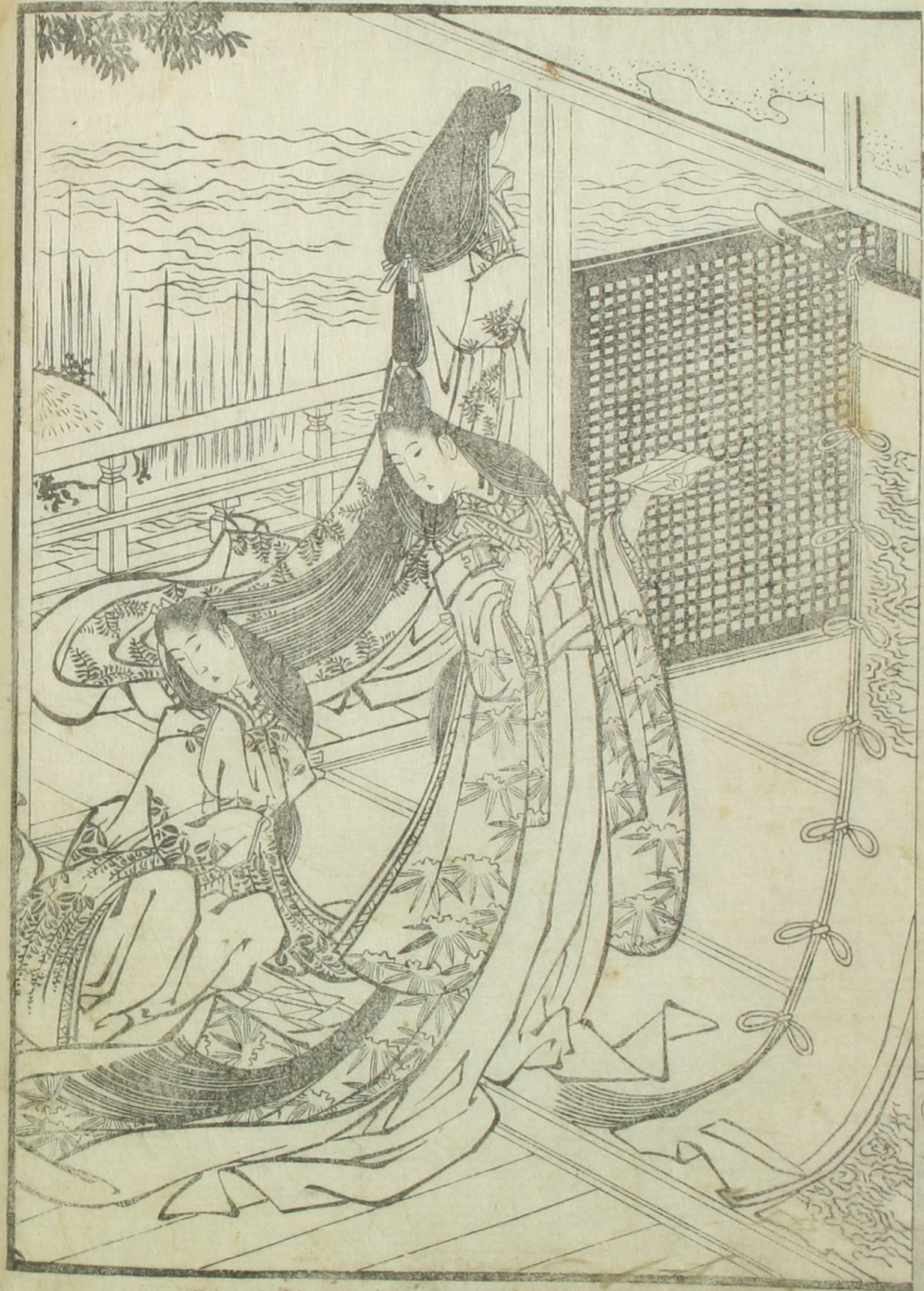
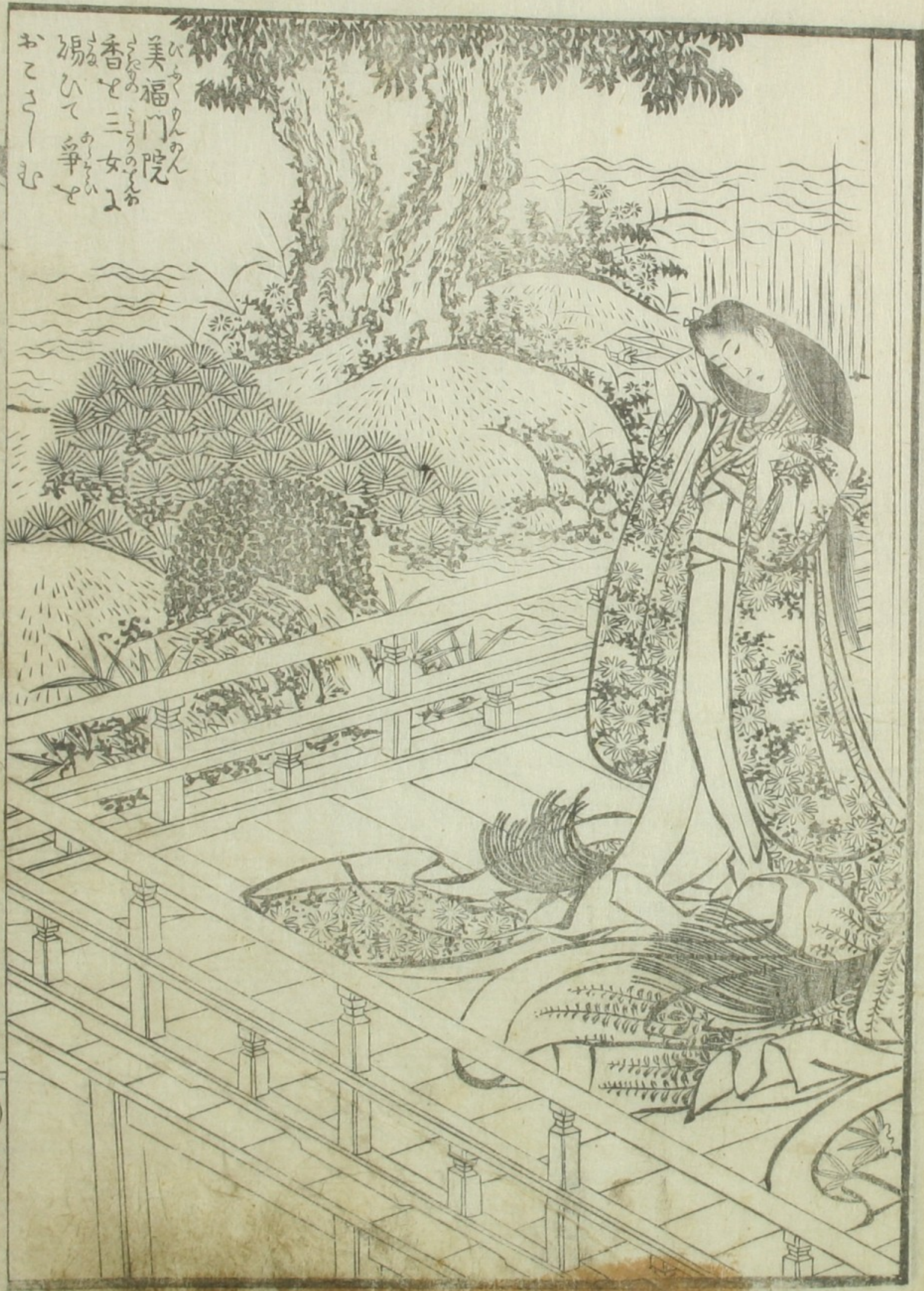
いとく妬ねらくくくてていいづづるる三さん人にんでで遠とほざざげげんんととけけるるののここと
ふふととややままししああひひららるる春はる雨あめののちちああややららああるる夜よ上う皇すまみののここと
せせああふふよよ序ついでややよよううりりららんんちちりりくくよよりりてて新あらた院いん帝みかど崇たか徳のりとと今いま上う帝すまみ
といいづづれれううちちいいつつくくここ深こほとと同おなああふふ上う皇すまみののこことと石いし清きよ水みづの
御みかど神かみ帝みかど應おこ仁のりのの賢とく才さい一ひとままででるるここ幼おととと愛あい一ひとああひひきき長ながいいほ
ききせせよよももああひひぬぬ幼おとハハ生な長ながいいううちちららんんととおおりりよよいいつつくくここも
いいととふふ深こほららるるべべ門かど院いん又また同おなよよ待まち賢とく門かど院いんのの舊ふるくく馴なああふふとと高たか
陽やう院いんのの新あらたよよ仕つかああふふとといいづづれれぞぞ上う皇すまみののこことと古ふるきき衣いははううつつら
香かををあありりううつつららるるががややじじくく新あらたきき衾ふとハハ層かさねざざりりここももくく
ししららるるがが志こころののここしし門かど院いん声こゑササ一ひとののああぐぐりりてて又また同おなよよ衣いとと衾ふとと

妾めかけとといいづづれれぞぞ上う皇すまみののこことと千ち羊やうのの華はな一ひと狐きつね腋わきよよハハああららううらら
べべ門かど院いんこことといいづづららててああぐぐりりららるる眉まゆめめくくふふううららてておおるるここと
ままでで今いま上う帝すまみとと妾めかけとととと戯あそ慮りよよううけけせせああふふぞぞああららるるをを長ながききが
ううへへよよもも宝たから篁あしのの長ながううららんんみみととここううららああふふききふふけけ二ふた三さん年ねん二ふた院いん
ううららたたててままつつりりしし三さん人にんのの女むすめよよおおららゆゆくく戯あそ慮りぞぞととせせああふふ三さんのの
芥かととああてて一ひとのの玉たまとと碎くだららゆゆいいここまましし上う皇すまみののこことと朕みづかををつつららユユアアよよえ
統かみとと兼かみ北きた一ひと支しああてて位ゐとと去き知ち命めいととここああるる上うはは本ほん院いん帝みかど在あるる帝みかど王わう
のの樂がくとと不ふ知ちまま貝かい葉はよよこことと粟あわ粒つぶををううららりりのの國くにぞぞななどど誣おと言ごははららるる日ひ
東あづま六む十じゅう八はち州しゅう小こ國こくにももああららじじとと其その國くにのの主ぬしとと一ひと國くにはは一ひと人にんとと徴あて
とともも多おほししとといいづづららるるがが況いは今いま三さん人にんのの女むすめとと徴あてううららるるとともも何なにててああららるるの

日本書紀卷之六

のぐき門院カドノノの妬心ネガレココロおてりく羨ウラヤムよハのじウラヤムちりちりウラヤム龍顔リウガンと見え
 てまろろ小例コタタリめろど妻ウメが詞コトバまうせらぬる三人サンニンの女メもぬれく
 けいつくしとせりぬ上皇カミミコよも常トコは聖壽セイジュと延ノボめんとして一包ヒツツミの
 百和香ヒヤクワカとホホホホ小コ志シて今宵イマヨは濕香シツカと三人サンニンの女メは賜たまひ雙陸スウリクの
 輸贏ウチマケよよりて輸得ウチマケと人者ヒトノシヤこれと妊いたて待まちてまろろせ上皇カミミコハ
 ひそりよけ香カと栞シよ御幸ミヨキめろしウチマケのさびよて夜ヨ一人
 の女メよりまろりて微かぬる一夜ヒトヨ小三人コサンニンと又まためんより却シテ敵慮テキリョめぐ
 さこめひらん上皇カミミコ色イロは荒あめ時ときめにバ羊車ヤウシャよまろろがひ蚊カ蝶テフで
 追おふ風流フウリウよもまろろりとして女房メヤウとして香カと賜たまふけ女房メヤウ兼かて
 門院カドノノの仰おんやせうけらるるやれバやがて三女サンメの局マカふりて是ココハ三人

のうち殊ことは上皇カミミコの寵遇シヨウユふらん人ヒトとて局マカのうちは董トウせ
 待まちめろし香カとまろろよ御幸ミヨキちらんとのみとこれと上皇カミミコ
 よハいづれともおひさきありて三人サンニンとて敵慮テキリョのふりし
 ると論ロて自定ジテイめとて出行イッパサぬ三人サンニンハ韓衣カンイが局マカは會あては小顔コガハ
 うちまろりていひ出るイデるをもかりしがむどめのやどころ讓ゆる
 合あひつれやうバハささむけ雨夜アメヨは自寵遇ジシヨウユの品定シナガタせんも真ま
 めるべしとて年としごろ馴なれてまろりしるみぞもおらもめく詰交ツグカよ
 け時ときまでハ三女サンメとやづくの始はじめよりちりき局マカは栖すて同胞トウボウのやう
 よむつこりハ露つゆ妬心ネガレココロかりしが聞きふつけ敵慮テキリョの仇かたきある怨うらみ
 寵遇シヨウユのこりたる妬ねがれとめて心のうち小生コナマて顔カハの色いろふあつれ



ぬ韓衣（つぎぬ）ひとりささぐぬおもむらして片臉（うしろ）は笑（え）みこころをけ
 君王環詞（まじりたまさ）でそらへてとや夜（よ）は子（こ）ひとりよもちくらん御幸（ごうき）
 介（か）のあはばし（し）は薰物（かほもの）誰（たれ）の主人（ぬし）とあふまき疾（はや）定（さだ）めあつりよよ
 韓衣（かんい）のよ妻（つま）よ敵慮（たか）深（ふか）や浅（あ）やいさ不知（しらず）日外（ひがひ）聞（き）せまのせ
 如妾（ごと）既（すで）よ皇胤（みまろ）やどして三四月（さんしげつ）よありぬ外（ほか）よ皇胤（みまろ）やどあひ
 方（かた）もあひはけ香（か）の主（ぬし）ハ妾（めかけ）あふん二女（ふたにむすめ）ハさふりてうごん詞（ことば）
 もはくつとらちて局（つぼ）こみ歸（かへ）入り衣（きぬ）うち被（か）てまらび卧（ふし）ぬ韓（かん）
 衣（い）其夜香（よるか）の媒（まへ）よ御幸（ごうき）ありて真（まこと）よ入（い）るせあふけ君王環（まじりたまさ）ハけ夜（よ）
 ころり心内（こころうち）常（とこ）あふぐとそ引籠（ひきかご）居（い）る三（さん）よさくねく寵遇（ちゆうぐ）韓衣（かんい）ひと
 つよ鐘（かね）て日（ひ）よ信時（しんとき）ありせあふ門院（かど）これとめてひそくふらこび

韓衣（かんい）でもいうでり遠（とほ）ざげんと心（こころ）くうもるぞうううめこの
 女房（にようぼう）何（なに）やらん耳語（みみご）くらせり驚（おどろ）せあふ氣（き）をひかりしがや
 めうてうわづりせあふ夫（おとこ）といふあるりとも洩（はな）間（ま）人のあがり
 とあふ韓衣（かんい）ハいりおほして皇子（みまろ）と生（う）むやといのうぬ寺社（てら）もの
 ざうらり一日（いちにち）ひごられたのこころ修験者（しゆげん）の妻（つま）一口（ひとくち）の短劍（たんけん）で持（も）ち
 めうりの人（ひと）遠（とほ）ざげ膝（ひざ）まうりせていひらるハ夫（おとこ）ハ愛生（あいせい）男子（なんし）の由（よし）
 いのり日夜（よるひ）不（ふ）怠（た）バ閑（ひま）で不得（えが）妾（めかけ）といへやえまのうら九懷（くわ）孕（な）み
 婦女（によめ）五月（ごがつ）より前（まへ）よ胎内（たいない）の兒女子（こども）あふんるせりともあふのハ
 鏡（かがみ）と懐（なつか）し男兒（おとこ）たふらんるといのうのハ劔（けん）と懐（なつか）し肌（かわ）で
 ともかさぎまばらのまほし灼然（しやくぜん）鏡（かがみ）ハ女の魂（たま）劔（けん）ハ男（おとこ）の魂（たま）をどらひ

わづらふもせむもろさたるみよハのじ。まゐてハ劔ハ吉備前州
友成が誠心こめてつくりし上で夫の丹誠と抽て加持しし
あれハ皇子降誕疑なし。人よあつせあふを肌とくかじあふ
上皇よまのりあん時も見認しありぬ。根よん用しあつたど。慇
よひやしあるよ。劔めさかせば長ハ七寸よも不亮表よハ龍
の珠よつとたる。形裏よハ劔で雕刀莖よ君萬歳友成と雕
し。双色青よこころ。地鉄紫どらて。るよんも清く夏日よ
水簾よ對が如く掛ハ眼もまもめて秋山よ斜陽と顧が如
修験者の妻よハ多物取らせて。そのちハ層身離し。おぢ
りり頃ハるのやうハ最暑うりし。薄暮よ上皇ハ韓衣ハ膝と枕

と一仮寐しあひてあかやと魔きあふ時よのやめく美
福門院よまよりあふ。韓衣胸よりて驚し奉る上皇額
の汗よ袖よて拭せあひ。槐とおぢき木のりよ小蟻の行く
でえ尾よるよ一の大やりの蜂まうぬ刺きと。後さるよ
面向つれば小蛇のりて朕が顔きとまのり居るよ。あかや
とよよとおひいて夢覚ぬ。今がし驚さであつを蟻王の女婿と
もあつたまのりよ。まご寐足らぬは声よそのさまよ。韓衣ハ懐
の劔よ雕する龍の君と護よこそあれと。ふよのほしくあひ居
よ。門院ハ上皇のりくこころ。ちりき所よ。人あてもるりりた
りて。韓衣ハ膝よ眠あふと妬おがして。座よあつて酒献ん

鳥羽音

とて上皇で別殿に誘ひ今夜ハとも小大殿で有りしあの上皇ハ
 門院のりのおの顔よてさうつあき熱水のさうくと落
 のやいあひ何ふと問ひあどはいつてはしありどやあり
 て妻劔は伏て後萎へまするあり妻死て後諫と納るはは玉
 體のあふまきむりりハ今上近衛もいづるありまさん元
 人罪のふみはれハ休妻罪あて死て於眼で祐づるあり
 ハと声で飲て哭あふ上皇ハおひけら興さああひこハ
 いうあるすぞ史臭ガ尸とて諫ハ病て死てあはれハ諫の
 納らると納らねばるハ天よまらせらるあべー今死て諫も
 及らぬあふあふはあふいざし生て諫とも理あらんなど

てあふがハざらん今上オであふさる中ハ何のあてありてつ
 とあふぞとのさふよ門院ガ顔拳あひてさうバ妬婦ハ
 りぞらるともカあく奏すのせん先問ひてまつらん垂
 仁帝の后帝と弒あんとせしりありや上皇のさふ史の載
 ところとえる小垂仁帝四年皇后佐穗媛の兄佐穗彦謀叛の
 志ありてひろりよ后と詰ひ劔と授て帝と弒しあんとら后
 おろろとさども辞さく或帝後の膝で枕あてて昼寐し
 あふ后いふせんとおひいづい不覚涙落て帝の顔ハ
 うらりけ時帝の夢ハ錦色小蛇ハ頸ハまつるるとして覺
 あひけ夢いふと問あふよ后つみり祢へあひますを萎あふ



鳥羽上皇
 韓衣盛と
 枕
 依覆し天



帝驚て上毛野八綱田でして佐穂彦を伐しむ其時后悲て
兄と訟てやがらふべくもあらざとて城に入り兄との不焚死
とのり門院同ふ危事くおもせあめや上皇のさあふ危し
とも危しなほ后は誠心のりとも夢は小蛇と不見ハ佐穂彦
が謀叛くやくあらしめさるべし。后帝は不肯といふど既叙を受
て懐よま後來帝を恨むのりバ其心不可測門院さあふバ后は
誠心のりて殃ぞのりあふよハあらで夢は冥ありて聖體よつふ
かさおとると遙は伊勢太神の方を拜めい大息つきてつよ上皇
昼夢えあひハいふふりかひあふ上皇は時くくめて昼の
夢けるりよ似くくひると覺て胸裏声と低して朕が愛何の

北なる人博士めしてトきこくめさんや門院の妻諫まのり
せんとおひあはけりく奏もいとけりしことれど新院崇徳帝心よも
めづ位ぞとづりあふりせふく恨玉ハ二方の門院も妾と
あくこあふとハはやくくど人の諛言ぞとつ流しくる小上皇
の宝弄耳煩せもこえさせあつは修生のるせバはあめてま
つづど。ゆがわき三人の女とまめくせあふ妾これと諫めを
妬てのりくやえんぞとくくく打せがぬ。夏の徴えんと
おがし。さるり。今宵韓衣で徴てゆきづり。懐と搜えあふべし
君佐穂媛のりよ類ハ何方の刺客か。人ハ敵慮よおせあふ
上皇ハゆきハめく忘きりようやがきつとて別殿ふ入せ

源平物語

三

あひて俄ハハに韓衣ハハとぞ徴めきき々々

國字鶴物語一の巻終



